



日用心法鈔四編隨筆 上

9
1303
10



〇七九
1913
10

歌又。老らぬ事知所た歌してい日老やるふ。口をひらくと後また
が見ゆと。此故又無智を学よ老て。如き老るすハ怒るべきも也然ま
とも。家業小ひまあき老ども。亦三輩来りて。猶又四編五編も作りて。
心ゆ事を出教示下さるべしと。ヤは故小拙あき成かへり見す。見女の
為小。知ま安きを身一として。記す者あり

平假名
日用心法鈔四篇隨筆 三冊

東都下谷金杉

壽福軒述



安政二乙卯年八月

自序

歌うた。老らぬ事。知川しんがわと願ねがふて。い日老やるな。口をひらくと腹はらで
が見ゆ。此故このゆゑ又無智むち無学むがく小老て。如き老るすハ。怒るべきも也。
然まども。家業かごう小ひまわく。四角しかくある文字もじのよむ事。出来でき
がたま。者共ものども兩三輩りゅうさんはい来りて。ヤはやうハ。先達せんたる。日用心法鈔
等のら。即教示すなはちしめ小よつて。世の中を。安心あんしんよ暮くらすやうに。あつ。悦よろこ
びやハ。猶亦なほまた。四編五編も作りて。心得こころえ事をこと出教示しめ下さる
べしと。ヤは故小。拙ちりいよく。三編さんへん迄いたハ。智惠ちゑをことふい。如き
たきども。跡あと小一字一行の。示すべき種かたがあり。是こゝ小依よてた新あらたり
ヤといへを。何卒なにとぞ口から出次第しだいのりぞ。隨筆ずいひつ小認ためめハた換かひ

日用心法鈔四篇

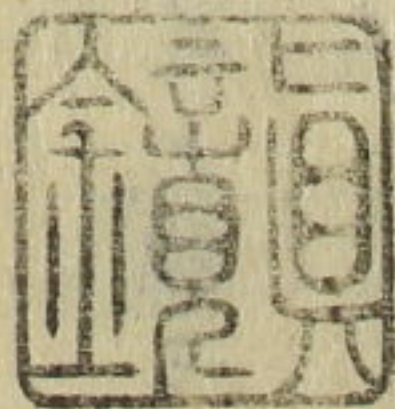
達而於之い子付控あき哉かへり見ず。家業よひまふさ者。
又ハ兒女の為小。知まあきを身一と志て。記す者や。文字此お
遠も何り。又同一歌。同一るをいふも何り。言葉も賤者く
志て。道理小當らざる事。多習へし。其所ハ赤宿怨下さる
也。

安政二乙卯年八月

京都下谷金杉

安樂寺

真鏡識



日用心法鈔四編隨筆

上

老夢草小。第一我分限を志りて。身分相應の所を守
るべし。たとひ金銀が沢山小何りとも町人ハ町人の分限
百姓ハ百姓の分限。都て着物食物住居向諸道具小至
る迄百姓町人小此亦ハ分限小ハせぬ如と。我身をか
へり見るべし。我身をかへり見ると。むごな金銀をつりては。
奈り者。身分知らずと。人をも笑と志す佛神も憎ま
まば志て。大ひよよし。然るに奈り過る故小。金銀小後交
へ人を倒し先祖の骨を折て持へ置玉ひ田畑を賣拂
諸道具家屋後迄あるせしハ。身のかどを志りて志て。おる

たる故の事也。何卒身の分限を守り。家職を生精し。万事小
けんやく致し。金銀を大切小まき。バ人欺へ不義理もかく
年貢諸掛り心。差誥らば。所高札の汚趣意小。肖かぬ故小
佛神天道の清心よ叶ふ也。清心小叶へを益く家門繁昌子
孫長久也

○又上を見ふ身の不道を志まの。五字七字の教へをよ
るへし。上天子より下百姓町人小至る迄。此教へ成忘る
時ハ。何やうしりく。たとへきせる一本でも。若しや我身小
過ハせぬ。衣類から法道具迄一とよく勤へて五分限の道
たる品あふ。佛神の御罰蒙るへし。扱又妻子小向ひ偽りを

いひ。家来杯へ向ひて。無理をいひて。人の心をやぶらせぬ
か。人の心をやぶる者ハ。天の罪人あり。人の心ハ直小神や佛也。
其尊き本心を苦志むるハ佛神をいたぬ。苦志むる咎か
きを。禍ひハ適きがつし。且又日本ハ。神國かきを。若不正直
ある。穢きたる心ある。即座小神罰を蒙るへし。又正直
清淨の心何らむ。而利生も。又何し。若無理非道の事
何をまけおみふく。早くさんげ志て。あつたむへし。何
らたむ志をあやまちも。忽ち消るあり。然る小不正直偽り
をかみさんと志て。色く板小。邪智をふりい適き人と志き
ども適きがたし。歸て罪は罪をかき祓て。弥く咎重くふ

○人々身の上は取て考へ置へき事有り。人々が勝手
 希望み有り。人間ハ身のはとを志す。我々を志たがる
 はあまる。兎角ふい物を。をいたがるにあまる。たとへを屋敷
 杯も廣いと。せまいが。よいと思ふせまいを。居る者ハ
 むろいがよいと思ふ。又ひろい家は居る者ハ。廣ひ家修獲
 掃除等よあまるから。せまいがよいと思ひ。又せまい家ハ
 居る者ハ。廣ひ家ハ住居したい。病煩ひ産ても何川と時ハ
 実小こまる居所がよい。せめてモウ一間も不い者志やと
 思ふ。又かぶよのぬ者ハ。何卒かごよのるやうにありた
 いと思ひ。又かごにのる身分の者ハ何所へ出ても不自由

千万あり。一僕一体小て浅草の觀音様也。又ハ兩國橋を
 所々の名所を。氣供小見て何るきたいと思ひ。又供廻り
 大勢連る衆ハ。何所へ出るも。三日も前より。其觸を出さ
 祢ばあぬ。又其日はあまハ。天氣がよくても悪ても大風で
 も大雨ても。鎗が降ても行祢ばあぬ。又行先小久後遊人
 て居たいと思ふても。中々自由ハあぬ。いまくーいと。悔
 んで居る衆も有り。又供のふい者ハせめて一人ありとつま
 たいと思ひ。又供の一人もつまる者ハせめて四五人もつま
 いと思ふハ人情の常也。又町人ハ武家をうらやみ。武家ハ
 折目正しく志て。花ハ櫻木。人ハ武士と志て。急度 志てよい者

かりと思ひ。又武家方ハ町人をうらやみ。町人ハ急度去るが
 かくて。安心でなき小よひと思ひ。鍛冶屋ハ豆腐屋とうふやよと思ひ。豆
 酒屋ハ藥種屋やくしゅやかよと思ひ互小癩病うづたひのつさうらみあり
 又日本橋邊小住居する者ハ。毎日まいにち駭おそく去い。必や所也。
 又折をり、火事ひやうハ何川なにがはてやけるゆら。何卒根岸なんそねがし、本所山の手
 の静しづる所へ引込ひきこんでお小くと。くらいたいと願ふ。又根岸本
 所山の手に此邊小居る者ハ。こん草深いくさふかい在郷同前の所小
 居るよりハ。何卒江戸の真中日本橋邊にほんばしに出でるツ持もて見た
 い。連つも江戸小住ありバ江戸の真中日本橋本町邊ほんまちに住居
 去こいと思ふ人も多し。又うはきか者ハ吉原きちげん、何所どこを

の賑合にぎあの場所ばしょへ出て。三味線さんみせんを挽まき。酒さけを呑のむ者
 者ものをくいて。益夜ちやくやさきぎ廻まり。といつて暮くし。いと思おもはへ
 何なにり。又吉原芝居町賑合きちげんしばいの場所ばしょ小居る者ものハ益夜三味線の
 音ねさききの声こゑも何なにき果はり。聞度きか小頭痛こづうづ八百也。小人こじんあり
 且かつ子こあり。よくない商賣しょうばいを仕しやうよりハ。商人しやうじんの株かぶても買かひて
 引ひきむら。又ハ町人とあつて。正道しやうだうの高たかひを致いたし。仁義にぎぎ礼智信れいちしん
 の片端かたはでも行おひ。人間にんげん仲間なまか小なりて暮くしたと思ふ人も何なになり。
 加かやう系けい。手勝手てかてを思おもふ人を算あへたらむいさも何なにるべし。
 兔角人間うかくにんげんハ。手前てまへの居所きよ手前てまへの家手前けあてまへ小何なに物ものを言いふと
 思おもふ。愚人おろちのくせあり。已おまが商賣しょうばい家業けあを非ひ小見みて。人比

商賣家業ハ。よいと思ふが。愚人のくせなり山崎の人ハ時鳥
 小耳をふさぎ。座頭の隣家小住人ハ。心をあぐさむる琴三
 味線。頭痛を病も理りなり爾まとも是も堪忍をして居
 ら祢ハあぐぬりや。兎角人間ハ。かい拍をくひたつにたま
 ○何事も。思へをあき。世中ハ。心とかけく。我身ありは。とい
 布歌の心をよく志。極。我よ。い株よ。以家業を以福德に
 来る道が何に。夫を志らず。身分不相應の願ひ。と
 心とかけき。心を苦者むるあり。是ハ何より起るといふ。身分
 相應の所を志らず。是事志す。故小己と我の心より
 貧乏人とかりて。くらすあり。他人より見まむ。よ。以株家督

何ぞ。福人と見へるあり。爾る小不足たら。て。貧乏人
 の仲るとあつて。くらすハ。無智とよへ。此道理を考へて。
 己まも。貧乏小あらぬや。う。不す。極
 ○若又万一仕合りよくても。心と思ハぬり。人君のくせあり。
 仕合れよ。い。る。ハ。棚。上。て。お。いて。ある。ハ。事。を。わ。り。よ。み。ま。て
 居る。余。人。から。見。ま。バ。仕。合。福。徳。ハ。来。過。て。居。る。に。此。方。ハ。仕。合
 ぶ。や。と。思。ハ。ぬ。人。間。の。足。事。を。志。ら。ぬ。も。あ。ま。る。余。人。より。見
 る。時。ハ。仕。合。ハ。十。分。も。廿。分。も。来。過。て。居。る。然。る。に。不。足。たら。く
 小。思。ふ。ハ。身。の。分。限。を。志。ら。ぬ。と。い。ふ。者。や。智。恵。も。あ。く。徳。も
 な。り。其。上。小。生。皮。不。機。根。あり。何。ん。で。其。扱。小。福。徳。が。来。る

者。考へて見よ。又千万人の上とあり。下を是。勝へよ
 きて。いひよ加るうが。ぼふりまふ。四の奴。是ハ尊貴の家
 に生き祿を出来ぬるや。是ハ前世ハ大壯ある。善根を積む
 故ハ今世ハ尊貴の家に生きて。人ふりやまハまふ。是ハ
 生身の神あり。是非共ハ尊敬すべし。又智慧もあく。徳もあく
 て。人ハ敬まハまると大損とある。是ハ依て其扱ハ。人ハ敬まハ
 せず共と。又天竺唐日本を知行ハ持ても。一度ハ三斗と
 五斗ハ。たべらませ祿を。是ハ入用あり。一日ハ五合宛ハ
 バ。沢山あり。寒くあく。むだるくあく。暮せむ。夫て大上ハ吉
 人ハ單物を着まを。此方ハ單物きる。人ハ綿入をき祿を。此

方ハ綿入をきる。人ハ飯をたべ祿ハ。此方ハ飯をたべ
 終ハ裸ていさるあり。終ハたへずいさるあり。此上ハ能仕
 合也。爾々ハ人ハ身の分限を志す。足事を志す故也。
 不足たらくでまら。愚癡のけ上あり。何卒身のほどを
 志す。足事知リ福人となる川て。日ハ悦ひよあへん。暮
 以 卷一
 又人ハのせと志す。よきる比何つた。勘定ハ入以志す。却
 きあとの何れと。勘定計里する。恒に措きあ。勘定をかりをする
 實ハあまり者や。何卒人ハ先祖代よりハの家督を守り。家
 業を大切ハ勤め。足事を知て志すべし。何所へ行ても思ハ

やうな所あり。何所へ行てもよひるが何と思ふ道りらる。
何所の鳥も。天窓が黒ひとし。諺をよく志す。夫もまを元
を置居る所が。一番よき所あり古々忘りかうといふ。爰
のるや。因縁何の所も居るがよし。是を業因縁天命不隨
ふといふ。是安心の道也。莊子も天命のわん共。志たきと
知て。是小隨ふ。是福德安心を修むの道ありといふ。こと
商賣の一所のをするは。我終小かゝぬやう。天命不任。其
利を見て斗ふべし。いづき花たりを補たりすると。よき事ハ
あきと志るべし。動く夜毎小。金銀入と志る道。小。儉約
はるさ。儉約金入用也。況や所が。店が。ハ。猶く金銀ういふと

志るべし

○又手前の小身上ををけき。人の大身上をうらやむ人。
後小ハ小身上も失ふ人あり。又己が家業ハ。そつと思ひ。
非不見る人ハ。後ハ小身上を仕舞ひ。貧乏難儀見る人
あり。あまり彼是と。人の富貴人の家業を。うらやむる
か。志。何を志ても。悪業事あり。何をしても。思ふやう小。
ちうぬと志るべし。智何の君子ハ。善道を行ひて。天命を
待へし。人間ハ仕合のよいがよいやら。己るいが。よい志る志る
か。人間万事。實翁が馬あまを。仕合が己るいとて。
あまり悔むべからず。又仕合がよいとて。あまり悦ぶべからず。

只善事をして。何事も。天命不任せて了すべし。又よ
 るが。何行なりと悦んで居る内は直ふ又已るい事う来。
 わるゆるが何行して。あげき悲んで居る内は。又笑ふる
 あり。苦樂あいませぬ。世の中あり。笑ふ事をかりむあり。
 又悲しむ事斗りもあり。泣たり笑ふたりある。世の中
 あり。其泣も笑ふも。夢見たやあるや。歌よ
 ○死んでおく。生きて笑ふ。人の為。泣も笑ふ。うそ世の中。
 ○夜半小見の夢又遠くぬ。浮世のふ。うつ里のりて。跡方もあり。
 と此二首の歌のゆふ。相遠ふし。おまにもつて。悪友ありあ
 聖法。あまりあげくべからず。又よき事ありとも何ゆり悦ふ

悪くす。善悪共小うつりのりて。跡方もあり。善悪共よ。
 貧者すへからず。唯善事をして了すべし。善事さすきば。
 悪友ありあり。善事さすきを。佛神天の守小何づか
 りてよ。いやふ志て下ささる。唯善事を志て。吉凶禍福
 ハ佛神天不任せ置べし。又歌よ
 ○貧しきも富も。樂も苦も。夢ておを何き夢ておを。
 此歌の心も相違ふし。世の中ハ夢といふてもよし。又夢
 であしといふてもよし。夢れ世の中といふても。夢助てハムら
 せぬ。急度身をおさめ。家業を出精し。つとめ祢をありぬ。
 義理も祝儀も不祝儀も。急度つとめ祢をありぬ。又公用

閑役ハ尚急度川とめ祢をありぬ。尔まバ夢の世とをかり
 思ふも。召遠ありさまは祢ふりて見まバ夢小相違か
 一。是ハ如何心得て。よかかん。答曰。うき城拂ハ人爲小ハ夢
 の世れ中と見るもよし。又祢をかり見まを。夢とふまとも
 是より行先世の中を渡る小ハ。実事と見て。家業禮義小
 ハ急度勤め祢バありぬと考べ一爰小至てハ夢てこそあり
 と。見祢ハありぬ。又夢であら。勤むをさるハ。急度つとめ祢
 バ。世ハ送りかた一
 ○人間万事塞翁が馬といふ事ハ。淮南子人間訓にいづく。
 唐王比塞といふ所小。世の中此事を。なくさとりたる老翁

何り。ある時我家小飼置たる所の馬何り。逃て胡國小行
 たり。大損かまバ。人是を笑止小思ひ。氣も毒なりといふを
 翁がいづく。必止禍ひといふも何れ。是も又福ひ来る本
 ありといふて。少しも愁ある事あり其後の馬胡國より
 駿馬を連来る。人皆是を大徳ありと。賀こひ小来まを塞
 翁といづく。必ず大徳といふ又何ら。是も又禍ひの来る本
 なりといふて。少しも悦小形色あり。其後塞翁が子息。よき
 駿馬を得たり。何でも馬小乗事を覚へて。軍でも何れを
 柶をして。立身出世せんと。思ひて。夫から其馬小無性小乗て。
 落馬者て。脚骨を打折たり。かこハとありたる故小人皆是笑

止ありといへ。塞翁がいよく。かあらす禍ひと定めんや
 是も又福ひの来る本あり。何そ憂あるふたふんやと。いひたり。
 夫より一年をかり後不隣國より。大軍来りて。塞上をせ
 むる事。急あり。其時健やある。若い者と。皆軍を出て
 討死を志たり。塞翁の子息をかり。落馬志て。離支とあ
 りたる故不。軍を出ず志て。父翁と共。命を全ふ志て。天然
 の壽命を持て。至誠不禍ひの幸ひを得たりと。然らば禍
 ひ。幸ひに幸ひが。禍ひに。凡智めてハ測り。諺不の。人間万
 事塞翁が馬と。不事ハ。是あり。此事をよく志りて。たとひ
 禍ひありとも。何まりおけくべからず。又幸ひあり共何まり

お益からず。苦樂あいませの世の中といふるささるへト
 ○又二人扶持小三十俵位の者ハ。何卒五人扶持不七十俵也。取
 たいと思ひ。又百石取ハ。三百石も不。いと思ひ。三百石取ハ七
 百石也。千石也。九千九百石もほ。いと思ひ。又一万石取ハ。方ハ。三
 万七万十萬五萬百方石也。不。いと思ふが。人情のなる。お
 まども。左漢ふりまく。望を通り不ハ行かた。皆身のがと志す
 す志て。身分不相應の高望斗りを志て。上の方斗り見て。下
 の方を見る事を志す故不。いつでも貪乏人の仲る不居るお
 り。若下の方を見たふ。いつでも福人の仲間不居るへ。此道理
 をよく考て。と志さる下の方を見て。福人おあり也。皆人が

身分より高望を志す。早とふけ。早仕合を好むから志す。いつでもやりそこない多し。地道の善事自然の福德ハ願ハて。一夜の内ハ。沢山金銀を拾ひ。俄に限ハあるを好む。故にいつでもやりそこない。おいをし。元の身分よりとる人多し。是ハ何より起るぞといふ。身分相應の所を志す。足事を志さざるより起る事也。又佛神聖人の教へを志さず志す。無理非道を志す。故に小人も憎む。不仕合とあるなり。何卒佛神の教へを信ず。足事を志して。福くとあり。○金銀を濁して仕合をよくするハ。何でも身せとく。家業を生精し。儉約を守り。人を敬ひ己を謙んたりて。順道

の行おいを志す。其上で漸く少く宛仕合が来ると志す。此少く宛の仕合。後ハ大仕合とあり。金持とあり。大家とよむるやう小あるなり。中々急にハ福德ハ来り。がた。塵埃がたまりて。久後志す。後ハ漸く福德安心の人とあり。此事ハ智者の金持。身上をよく志たり人。尋糸問ふて志す。誰々も儉約質素にして。先祖代々より。傳りたる元の家業がよいと志す。彼是とかへハよろし。米屋も銀屋も。豆腐屋も。一切の家業。其外公家武家出家医

者何小よらず。いつもかきぬるを志て居る人ハ。一生無
 事小ムらすや。かきりたる事を好みかきりたる事残す
 人ハ。仕落も耻も有りて。末ハ家を失ふ人る。日月の
 毎年毎日相かえらず照一五小を見てよく志るべし。人
 間ハ日月の暫くも休こなく。行道一五あやりに。昼夜働
 く。何ても日月を本とすべし。彼是と物事残すハ。
 至てよろしうらず。万一加へ縁ハあがぬ事何ぞ。運小来ド
 縁小随がつてかへ里見るへし。先ハ本の通りがよきと志る
 へし。つど冬夜毎小損が立と。蜻蛉の飛直して。元め
 枝と。よふ句ふてよく志る。一

◎紫式部が曰皆人毎小。物なござる内ハ。人のいさめをよ
 くいさ。道を守る心有り。其望を叶へて。心の倦ふる時ハ皆
 をボ里て。貫きをいやめ。賤志き成何ある。故小諸く
 の佛神をミをかるへ加社。五あや。其望を叶へて。あしから
 志めんよりハ。叶へず志てよ。志めんハ。大慈大悲あるへし
 と。此事前編も出たり。世の中よくあるる志を。度
 ら出していましめとするる。是小よつて。勘へえり。仕合の
 よい仕合。仕合のわるい。仕合りども志かたし。若望事
 が叶いて仕合がよくあると。直小我俣を出し。奢り高ふと。謀
 叛杯をたく。無理を志て。却て身を止らす人多し。

無理我俣ハいづき威勢がよくなくてハ。出来ぬ者や。いづ
き仕合りよくて人の上小立て。いふるの通る人であくは。
大悪ハ出来ぬ者也

中將姫のまんたらふ。下品下生の五逆十悪の大罪人ハ。威
勢のよい殿様が椽先江出て。悪事の差圖を考ておさる所か
加いて何る。威勢のよい殿様が。十悪五逆の大罪人の手本小
出して何る。尤至極の手本也。位の高ハ威勢のよい人であ
くてハ。五逆十悪の大罪ハ造里加こ。是ハ九夫小ハ志社が
ん。佛菩薩の所作小志て。奇妙不思議のまんたらふり
信を越一威勢のよい者也。貧乏人ハ。無理やむろんハ出来ぬ

たり。いづき威勢のよい。いふるの通る人であくは無理や
ぼう判ハ出来ぬ。願ひ望り叶ひて。仕合もよくあつせい
もよくあつて。いふるの通る故ハ無理非道を致す。大欲を
する故ハ終は家を失ひ。身を亡せ。かやうの人世間不
沢山あり目前。此故ハ佛神。人ニ福德高位を授け玉
ふ。是佛神の大慈悲也。尔らバ仕合のよいも。一生安心
小世をくらす。所の種共あるへ一人ハ此儀をよく心得て。
仕合のよいも。あはりあげくべからず。上ハ威勢のよいも
強い。恐ろしい人が何と。正直小志て至極よい人な彼も
其人があくると直ハ我俣無理を考て。恐ろしい我慢者

とる。是ハ誰ガ身小也。とく何事也。氣を付てあきやうのすべし一屋小猫あけきハ。白晝小老前行あハるとハ志のる也

○所大名衆也。即籓本衆也。其外一切の衆也。部屋住の内ハ。至極柔和小志也。臣下共のいさめもよく聞玉ひて。至極よきやうも何つたまは一函の殿とあり。一郡一斬の主トとあると。直小我慢を出して。臣下の諫めも。何の聞玉ひ。唯我低おふりを志て。國中の万民をくる志め。難儀困窮させ玉ふ故小。大ひ小志也。國家を失ひ小志也。押込隠居杯とあるも何り。是其望叶へて。心の低ある時ハ無

理非道を志て。國家を亡し身を失ふ故小佛神をこよ叶へ杯。玉ふとハ。紫式部の名言あり。一切の人。此何やまうかきやうも志べし又役義を勤る衆也。此方が役義を勤めたらバ。物事を真直小志て。海上の為とあり。下万民の為とありんと思へとも後ハ其心がなくあつて。依怙鼻負の沙汰をして。名をけ加し。家小疵を付る人多し。何小よらば。初めハ慎みもよけまども威勢がよくあつて。通ると。直小志を勝手を志て。終小ハ家を失ひ身を亡ふ。是を書經ハ始め何さるる事。終り何事ありと。誰でも始の志し

よけきとも後小ハ其志一を失ふて。悪事をすするあり。是
 を始めハよけきとも終りるにいとりの事をり何卒人々始
 めをよく致し。終りもよく志て。上へのよき人とあるべし。終り
 をよき志る。人であくてハ。を以人とハいひかだし。何卒始よ
 り終迄。忠孝仁義礼智信の五常を行ふて。清淨けつ白
 小すべし。さすきを佛神の守り何つて。をとも叶へあて
 追く出世するに疑ひあり。此儀をよく志る也。

○又世間のよめも。養子も。始めの内ハ慎ともよくて。人のほ
 むる事何きとも。段々と馴染小随て。後小ハ我徒者とあり
 て。人々の笑ハき。終小ハ其家を。追出さるやうなるもの

あり。又嫁の時思ふに。此方々姑めとありたる時ハ。何のや
 り。意地あるくハせまい。此方が年がよつても。何のやうなる世
 話ハやくまいと思へとも。已まも姑めとあるは。意地がでかく
 あり。世話もやくやうなる者也。是大方の人の定法あり
 定法又嫁や養子が在るいから。姑めも意地も在るくいたし。世
 話もやか祢をあらぬ事も有る。嫁や養子のやうに世をみ
 る。豎か見ても。横から見ても。身上仕廻と見へるねまあ
 る世話もやか祢をあらぬ事。此何なる。亦きども意地の在るい
 も。世話やくも。おどよく。塩和の何る者あり向う聞あつた。
 世話をやくべし。若向ふがきかぬと見てハ。受考て世話を

くべかゞゞ。まかぬもの。是非共。まかせやうとまきば。
 内ハ騷動なり内を騷動させる位あるハ。い且ぬ又勝があ
 るとある也。何でも勝の道を通るべし。是を智者とい
 ふ。たとへよき道理何りとも。向ふがまかぬと見てを。変者
 て世話をやくべかゞゞ。是智者也。亦る又此道理を考へば
 未て。彼是といふハよろし。世話やかまざる人。あまり
 遠且ぬ愚者あるべし。あまり世話をやくと。まかく也の。まかぬ
 やうの。あるとまきべし。論語の。因又未て。まきハ。能
 うとんせらる。主人又未て。まきを辱めらる。何り。且
 づ嫁養子たり共此道理何り。よく考へて。あまり世話をやく

から。何事も中道のよい所を通りまきべし。何事も始終
 治まりの。よいやうの考へ行ふべし。
 ① 過たると及ぶさるとの。中道を。たぐ且ぬやうの。真直又由
 け亦まとも此者共。若親不孝未て。又家もつふ以やうの者共
 あり。所詮此家はハ差置がたし。心を定め。追出た手當を
 べし。いつま家の治まりのよいやうの。まかぬもの。ま
 かせやうとす。よりハ。何ま理法外又ある。くぞ家の。おのぬ
 やうの。まきべし。
 ② 又若い者新参者。尻り何た。まると。我俵は。手勝手を志
 す。老人主人をこまらせ。其事あきやうの。まきべし。老人主人を

にまゝせる者ハ。不忠者ニあて。福德あり。身終る迄負之と
 老るべし。是天の所定法あり。○奉公ニ出た日の心。いつ迄も忘さば念をいきて仕へよ。と
 此歌の心をよく老るべし。奉公人も。始めて奉公又出。ぬき
 さらすの事を。忘さば念を。よく辛抱考て。出世せよ。然るは
 其事を忘きて。後ハ抱山抱女等を好きて。王家をかた
 め損を立て。已まゆ行方知さばとある者多し。是始の心を
 走る。故也。世間の嫁も又かくのごと。嫁入考て来た日の
 事をいつ迄も忘さば。舅姑めは孝行を尽し。此西二人を大
 切又すまむ。家を出るやうある事ハ何るべからば。十七八の嫁の

時ハ。至極柔和考て。何所ハ腹立いかりともある所も見へあ
 りた。尾が何た、あると。直心忍ろし。我慢者ともある。舅
 姑めは不孝を致し。仰せらる事も。まかぬやうあるもの
 あり。此事ハいふらもある。皆は存知の通りあり。何
 卒此事あきやうは致した。随ふと柔和考て。此二人
 の心ハ叶あやうは走べし。さきむ家内も和合し。繁昌考
 て。皆々安心無事ニ世を送る事疑ひか。○姑めを親ぞと思ひ。つかへある。いかて二度。家をい川へま
 又舅姑めの方でも機を付孫をある事何里。此方のためハ。
 身上のえる所より来りたり。嫁の在所より此方の身上

ハ。余かどよし。尔るは悦ひの色も見へば其上は此方とを
 眞実心は大切と思はぬ。揆子あり是を悦ひて眞実の教ま
 いて。仕ふべき筈あるよ。左もあきハ心よからばと思ふ心をよ
 めれ方ありあうて。よめも心よ切らず思ふあり。此故は何
 となく疎遠の所見へたう。是始め方がよろし。此故は何
 所の身上が是るくても因縁有りて。よめも来たる者あり又
 因縁有りて貰ひた者あり。又其揆の身上のつ里あり
 たる所からわやう。貰ふといふよゆきかたし。身上のよ
 所かり貰ふも有り。又さうい所から貰ふも有り。又此方の
 むせめもよい所へやることも有り。又さうい所へやること

も有り。又挑燈は釣鐘の縁組も有り。又下女を引上てよめ
 小者たる家も何また有りあり。色く狭くはあて。因縁次第
 なり。尔るは此方の身上がよいとて。夫を眞まわけて彼是と
 思ふハ不和の本也。此心あきやう小止へし。又よめもあるい
 所より。よい所へ来たるあり。随ふとひげあてらし。各別は
 孝行を致せべし。是ハ自然の道理のあて。嫁の方ハ此心を
 くてハ。あらぬ事也。是則ち上下和合の所あり。此外よめを
 憎むも色くあり。又よめの不孝も。色くあきとものひび
 がたし。爰小下女を引上てよめもあたる家有り。心持の為
 には因縁あるは見て考へ置ふべし

柱と取ひまはせ。其古い柱ハこゝあたで。新しい柱ハよめてござ
 る。あふとが古くふりて。腰がかんで田がそが来と故の家
 をたもつ事が出来ませぬ。夫故小よめのあたらしいをいら
 小。家を持てもろふのであざる。そほまをよめハ苦勞を役
 を請取て。何も仕合ふ事ハござらぬ。あつるをあらずしてよ
 い身上を下女のよめ小や何と杯と思ひませよハ。まづいん
 け遠ひであざる。夫のこあはば。縁の下に住居あて居る大
 の子。又ハ井戸の中へ落ちてい。蛙あんぞのやうに。引揚
 たの引出したのと。下あむ心がござる故小。夫が自然とよめ
 の心も。通よりよして。あんふ所の居やうよりハ。よそあへ

行もよかり小と。あて心が出来たぬ。自然と氣休小あり
 由した。こゝろあた事故小。あふとの業といひました。身共が
 何やゆ里でござる。物をよく合点さ何あやまといやあ奉
 公を考て居る者が主人の見出し小預り。其家の主トと
 あるわどあ者あまを。こあふがよめ小せずとも何所へ行て
 小。其位ふ福德小ハありまはる。是ハ智慧を覺でハゆきゆ
 せぬ。持て生きた。其身の福德でござるといの。夫を考つて小
 此大身体を賞ひあがる。あまがたい共思はぬハ。思あらば
 杯と。色く換ふ。悪口をいじ考ゆるハ。皆こあふの何やまう
 とひ小者也又まバ。こあふハ。天窓をそりて居や考ゆるが髪を

おろし大八何の為者や。隱居者て後世菩提を願ひ人あり
 隱居とハ隱居居るとかきまはる。夫を忘きて。物々事毎
 差出て彼是といひ者やハ。大ひある心得違ひでござるといひ。
 髪を剃と跡一角がをへたといひはぬや。小川者や之隨
 分と心を柔和の心もち。後生菩提を願ハ者や也。唯堪忍を
 よく者て。よめを眞実の娘め者やと。思ふ心小あらつ者や
 也。そ小成ると。よめも又眞実の親者やと思ひ。大切小者てく
 是極む。左様小あると。誰う仕合てござるぞ。皆こあたの仕
 合とある。加やう小。たがひよ打とけて。平ひ小中よくある者。
 短氣我終し自然と直りまは。くまぐも堪忍をよく者て。

家のおさまり此よのやう小。き川者や也。こあた一人よく堪
 忍むを。家内中の者ハ和合するあり。和合すまば安樂世
 界也。必むく。此大身体をやる。惜い事者や杯と執心せん。愚
 癡を起さずと。早く安心小。あら川者や也。狂歌をよみませ
 う。工夫さつ者や也。

○和んの小の。髪を下志と。其跡へ。角をそやして。つゝふよめ女を
 是ハ禪宗の悟りを開た和尚極の。はかきあさまは本也。是ハ
 世間小。加やうふ事ういらも何の故小。夫を教へ人が為小。板
 行小志て。世間へひろめたる者也。折角大身体を。下女小やり
 るがら。恨みを受るやうふるのをせ。ハ志うとめ此道を志すぬ

故の事ことあり。あき小こよりて教訓きょうくんを受う承じやうむもよもん道みちの志しがた
 一。よき教しやうへ聞きてよよい道みちを通とほるへ一
 〇 そりたきハ。心の内うちの。まごま髪かみ。つむりの上うへ。兔うさぎも角かくも
 〇 ころもとハ。人ひとよよつての。名なありけり。黒帷くろいび子の袖そでの長ながさよ
 〇 身体しんたいを。やつて死しると。思おもふふよ。貫つらふと人ひとも。又またおひてゆく
 〇 我物わがものと。思おもへど後のちハ人ひとのまのそのほたのちも。人ひとの物ものあり
 此歌このうたの心こころよよりて見みまバ。大身体おほしんたいを人ひとよやるとて。何なにまより
 惜をむべからバ。因縁いんえん何なにも人ひと小こやつて死しすへ一。已たまハ。まが魂たまし
 ひの極樂ごくらくへ行いやう小こ。後生おそまうを預まかひ。念おん佛んぶつを申まをすへ一。是こゝ
 を大利だいり根こんの人ひととりふ。よく考かんがへて見みるべ一。何なにかど惜おしく

も跡あと小こ置おて行い承じやうをありぬ。一文いちもん一いちさつ。着物きりもの一いち紙かみ一いち枚まいも持もち
 て行い事ことハありがた一。亦またらバ因縁いんえん何なにも人ひと小こ執心しやくしんかく渡わたして。
 已たまハ安心あんしんよ後世おそよを預まかひ。念おん佛んぶつをを申まをす。何なにかどの利徳りとく
 が何なにるう志しまがた一。是こゝより外ほかよ手段しゆげんか一。執心しやくしん志しても志し
 て行い承じやうをありぬ。執心しやくしんせば共置ともをて行い承じやうをからぬ。亦またらバ執しやく
 心しんせぬよ。何なにかどの利徳りとく安心あんしんが何なにるか。志しまがた一。又また罪つみも
 作つくらま志して。大おほき小こよい。何なにまらめめよい人ひと志しやと。人ひとも不
 めはま。此道理このどうりをよく會得くわいとく志して。心こころよく因縁いんえん何なにも人ひと小
 渡わたすへ一。先身まゝしん身体しんたいをやつて死しると思おもふふよ。もろふた人も。
 又またおひてゆく等とほり。二首ふたひたの歌うたの心こころよくさとるべ一。跡あとハいふ小

及む

○いざあきの末ハ何多汚何多汚。本を礼せを。由緒何るもの
 ○子早振神の所末ハ。我身小て。出入の息ハ。外宮内宮
 ○天地の中又そへたも。草木道神のまがたと。恐まつくあめ
 生色付の本心といふ者ハ。男女の差別もふく。貴賤賢愚の高
 下もふく。唯一面の所神体也。儒家小ハ是を明德といふ。佛
 家小てハ。是を佛性共如来共いふ。此故小少一でも。曲た事
 ハ。曲たとあり。氣味の悪い嘘ハ直ようそとあり。隠したる
 ハ。隠したと。直小あるや何と何きららふ者あり。白隠の粉
 引歌も。うそハ又又覺が何るぞ人ハ免もあま。口はさあると。

何り古徳の歌小

○世の中ハ。人ハ老らぬ小。罪何まを。我身をせむる。我心あり
 と。正法念經小。獄卒罪人を責ていやく。異人罪を作りて。汝
 をせむる小あふせ。汝が罪汝トをせむるありと何り。此道理小
 相違ふ。人々手前く。罪を作らぬやう小。すべ。若罪を
 作まバ手前の作りたも罪小手前がせめらる。あり。自業自
 得道る。事え出来がた。然きを下男下女たり共いやあむ
 へき者壹人もあ。皆神の所末小志て。天照大神の所子也。
 我身も神の所末あきを。身を大切小志て。心も正直小持へ。
 人様も神の所末あまバ大切小志べ。世界中小一人と志て。蘇

末小生べき人あり。四海皆兄弟也。

○他人志やと、思ふ本ハ天地の中小生た。同ト兄弟

此通りかまを下男下女といども。いや志むべき者一人もか。

皆我身同族兄弟と思ふべ。然きとし表向ハ上ハ上。下ハ下と

わつべ。貴賤上下急度口けて。上を敬ひ下をあはさみ。

中よく暮すが。神の傍末也。下たる者ハ。たと上小無理あ

至。少もかまむと。敬ひて下知を受るが。下たる者の道

あり。是小福德安心有り。又上たる人ハ下の者の難儀小から

ぬやう小生べ。是ハ上たる人の道也。上下和合志。礼義を乱さ

ぬが。神の所末あり。上下礼義乱る時ハ。神の所末あり。禽

獸仲間あり。此義を弁まへて。上下和合志てくまへ。

弟一人でも人を苦志むる時ハ。佛神を苦志むる小當。故小

天罰を蒙むりて。貧乏人ぎをするあり。又何など高位高

官の所方ても。万民を苦志めむ時ハ。是又多くの佛神を苦

志めむ小當。故小國家や臣下小大災ひ有りて。所家小騒動

大ハ。大貪之。大苦勞を志む小考へ。扱護小功小あま

を功を失ひ。利小慕ま。非小落るといふ有り。大恩もあまり

思ひさせると。其大恩を無小生る事有り。下女を引上て内の

よめ小致し。大身体を下ささるハ。下女の身小取りてハ。いをウ

リ。何うかたがらん。此大恩ハ須弥山より小高く。大海より小深し。

一興と思ふべし。是ハ此志うとめの事とをかり思ふべからば。世
 間ハ沢山小阿も事あるを。此咄しを聞て人々功小おこらず思
 小きせは。中道のよい所を通り受ふべし。又おまが是程の大恩
 を受てやつた小。其恩を報トもせぬといふ人阿り。夫ハ恩を志
 とりぬ者小阿らず。恩を貸といふ者也。又高あひの恩として
 飯を一盃施こしたるら。大方三盃り五盃小あつて。歸るて阿
 ろふと思ふ。勸定づくの施し小志て。高あひのちどあしと
 りぬ者也。功德至て歩ふ。誠の施しといふハ。喜捨といふて
 喜ひ捨て。跡の報ひを思ふぬ事也。是ハ少くの施しでも大功
 徳とある。是小よつて施しを志たらば。其報ひを思ふべし

唯我志しあまを。施すと思ふて喜ひ捨べし。又人様より恩
 小あつた事ハ。少しも忘まぬやう小志べし。人様より恩小
 あつたを忘まてハ。相濟不申ハ是ハ心小かけて師恩を報
 し奉るべし。華嚴經ハ恩残あつざる者ハ横死を志すと阿
 り。又狀尊ハ己まハ人の恩を志りて。報したも故小今佛とあ
 つたりと。仰せらきたり。然らば恩を受て恩を報するハ大切
 の事也。此道理をよく合点志て。師恩を受た者ハ何りかたく思
 ひて。何でも所恩を報し奉るべし。父母ハ勿論義より目上の人老
 人年上の人ハ。皆恩人あり急度敬ひ受ふべし。是人道の第一小
 志て。子弟たる者の通るべき道也。雜寶藏經ハ。父母宿老を

恭敬をべー。大利益有りとの云へり。此經文を信ト云へ。儒佛神
 共小。孝悌忠信の道を教へ玉へり。是を急度行ふひ玉へ。又上
 の者ハ。随分と柔和小者て。かりまむいかる事なく。物事を温
 順小致をへー。又父母違ハ。大体の事ハ。子息也嫁小任せて。後
 生を頼ひ信念佛をす玉へべー。未来の支度を十分小致をべー。
 是ガ人間小生きた所詮といふ者也。後生を願ふ者ハ。未来斗
 りの安心小何ら成。け世も又大安心也。此念佛をす玉者ハ。現世
 後生也。大安也。是を一挙兩得の所念佛といふ。此心を無
 能上人の御歌小
 ○後の世も。此世も成小。南無阿弥陀。ほとけ任せの身あを安んず

念佛ハ。命をのへて。災難をよけて。後生と助つるぞかー
 と。かやうも何うがたい念佛あきを。行住坐卧小心小かけし唱
 へ玉ふべー。いづま小者ても。此志やを小久安ハ居らぬ。永逗留
 へせぬ。是小よりて。いつ迄も此世の世話ハ者て。おらまかい。よ
 いかげん小見切て一切の事ハ嫁や子息小打任せて。我ハ唯心念
 佛をす玉ふべー。さまきを極樂の外小行所かーといふ。身の上也。
 何うがたく存トて称名を相續をべー。徳本の御歌小
 ○一筋小。南無阿弥陀佛を唱ふまを。極樂の外小行どころろかー
 ○口先で阿弥陀ぶつく。いをよい。心かく者て。い玉る玉のり
 ○往生ハ世小安けまど。皆人のすま心の。かくてこそせ称

○阿弥陀佛と。いふハ本願弘誓の船不とけ任せ又唱まばのる
 ○南無阿弥陀。唱へて威儀も。学文も具表てらふふと唱まきい
 ○つそめゆも。あむあみたぶといふ人ハ。無上菩提。疾至るなり
 是皆徳本行者の所歌あり。此行者ハ手習も学文も志た事
 あり。一文不通の人あり。唯念佛を唱へよふた計りて。廿七歳
 の五月。阿弥陀如来を拜見致し。夫より三昧発得と。悟り
 を開き。夫より学文も戒行も。よくそあがりて。何ひとつと
 考て。考ぬるふき身の上とあり五ふ。現小阿弥陀佛。小少
 目小かり。極樂を見た人の仰せあるまむ。深く信じて。常小念
 佛を唱へよふべし

○扱孟子の四小。爰小少飯を施こむ人あり。是を治きを生。
 こきを治さきむ。死をふ不どの大事の食あり。此大事の
 食ても。いや志め。あるどりて。何たふまむ。たとへ死をとも受
 ず。人の身小取りてハ。生死不どの大事ハあけまむ。いや志め
 て。與ふまを受ぬとあり。いんや今の嫁や養子や。又其不
 の者は小。恩を志た事杯を。あまり思まきせ口きたふくい
 きてハ。大身体も。受ぬ氣ある事あり。こきふよりて。大恩
 もあまり思まきせると。無ある事あり。儀を心けて與ふ
 べし。与へやうがよけまむ。受た者も大悦び。與へた人も大功徳
 を得るあり

○先小出さきいだしたる者もののいふ通り。下男下女げおとこげおんなを引上ひきあて。主人しゅじん入小いりこすると。愚鈍無智ぐどんむちの加まへさ小こい。ま小こおめと氣き小こか川かて。直ただ又また我わが俵はたけを坐いた非道ひたうを吐はく事ことあり。元の主人もとしゅじんといひ。今の親おやおまむ。大切せうのけ上うふ。其大切そのせうか養父ようふ母ははを糸末いとすえ致いたし。所心おそろ小違ちがひて。手勝手てうてを働たらく事ことあり。大おほひ又またこゝろ。手代てだいを家いへの娘むすめ又まため何なににせ。あるひハ下の者しもものを引上ひきあて跡取あとどり小こ屯とんる小こ。一旦たんいよけまを。後のち又また我わが俵はたけを働たらき。家いへの娘むすめと糸末いとすえ未また又また致いたし。かかの女め心こころを加まけ。又また惡所あくところ通とほひも屯とんるやう小こある事ことあり。不届ふとど子こ万まんあり。家いへの娘むすめの心こころ又またもあつて見るへし。かやうな。うつけ者うつけもの。世間せけん又また沢山たけさん又またあり。不実ふまじの此上こゝろか。

家内いへうちの人ひとハ勿論もちろん世間せけんの人ひとも憎にくむ所ところ小こあて。受得うけたる福徳ふくとくも来きたらむと志こころて。貧乏びんぼう氣き苦勞くろう屯とんるあり。此下このしもの養子やうこの所ところ又また委まかしけまを見るへし。下男下女げおとこげおんなを引上ひきあて養子やうこと屯とんると志こころむら。くの内うちいよけまとも。屍しかばねが何なにたかまると。直ただ又また養父ようふ母はは志こころむらと。志こころめを。不孝ふけう又また糸末いとすえ又また屯とんる事ことハ。おま長右衛門ちやうゑもんの淨じやうるり又またも出て何なにまを。世間せけん又またよくある事ことと見みへる。若主人わかしゅじんの所ところ目鑑めかんよて。下男下女げおとこげおんな其そのおつ杯おひ杯おひを引上ひきあ下くださらば。何なにか養父ようふ母はは志こころむらと。志こころめと。孝行けうかうを尽つくし。万事ばんじ下知げちを受うけて。背そむかぬやう又またすべし。善惡ぜんあく是非ぜひをいはず。損徳そんとくをいはず。何なにやうの事こと無理むりを仰おほせらるゝとも。夫おれ又また歩ありも。かまはぬ

是。隨あたらひ敬うやまひ奉たてまつるべし。是こゝハ養やう子こよめたる人の道也道ちちみち
 さへ通とむきたる。何なんも事ことあり。さてを家内けい内和わ合あせて。家
 ハ繁はん昌しょうを勉つとむ。何なんふも引ひ上あ下くださまの事ことを。骨身こつみ小
 志こゝろにて何なんりがたく思おもひ。一生いっしやうよく身み慎しんむ。家業かぎやうを出い精せいし。
 此家このいへを繁はん昌しょうさせて。涉せつ恩おんを送おくり奉たてまつるべし。爰こゝは主人しゆじんの本妻ほんさい
 死去しきよ付つ。涉せつ目めが祐すけ又またよりて。下女げによを引ひ上あ後妻ごさいとせんと屯とんむ
 小こ後妻ごさいとふらずあて。一生いっしやう奉ほう公人こうじんよてくらせしとふり。其
 上うへは家内けい内の始末しまつをよくあて。世間せけんの人ひとよふめらまきたる女
 何なんり

○耳みみの垢あかとりふ書あよす。攝州せつしゅう大坂おさか天満てんまんは吉野屋きちのや九右衛門くさうゑもんといふ

千物せんぶつ問屋もんや何なんり。當主人とうしゆじん九右衛門くさうゑもんハ三十五さんじゆうご也。其内室そのうちむろ大病だいびやうよて。
 九死きゅうし一生いっしやうのみまきり。亭主ていしゆ小向こむかひひ。内義ないぎさまけるハ。私事わたくしごとハ。
 此度このたびの病氣びやうき速すみも快氣かいき覺束おがつかふ。ふどふく命終いのちのしゆう致いたすべし。
 こまよよりて心こゝろさまじりの事ことハ。一通いっとうり置お度たく何卒なんじゆ涉せつ
 聞き下くださるべし。子供こども兩人りふにん未まだ幼年ちゆうねんよいへを。是非せひ共とも後妻ごさい
 をいれよふささるべくい。何卒なんじゆ氣性きせうよろしき者ものを。專せん要よう又
 此名このならま下くださるべし。兎角とかくふさぬ中うちハ。了簡りやくかん違ちがひ何なんりせ。終しゆう
 子を廉れん宗しゆ小こむる者ものありさむをば未まくも。家の障さだりよふふ
 る事こと小こ。何卒なんじゆ直ちやく友ゆう所計しよけいらひ下くださま。二人ふたりの子供こどもの。何なんんぎ
 せぬやう小こ。此この頼たのみやい。此この名なよ上うへへき事ことふくいとある。九

右邊つ是を聞て。アさきけるい。妻ハ子孫をのこさん為ふ
 け。昨^{せが}は^り兩人こまある上い。其元命終の後い。妻を入用ふ
 し。つまとアをい。其方一人。かふの持間^{もちま}あといふ。病人
 大ひよよろあひ。うき一けある。形勢^{けいせい}よて。夫い何りかたき
 思召^{おもひ}よいへ共。年月長き事故。家内の取締^{とらとまり}りかたき。こま
 かくてハ相濟^{あひまみ}不^なすい。左いり子供の内より百使^{ひやくし}ひ心根^{こころね}を
 よく存^{ぞん}ト居^ゐい女を。不肖^{ふせう}よいへ共。元来^{げんらい}実体^{じつたい}ふる者よ
 こ。子供を大切^{たいせつ}小仕^{せう}い。氣性^{きせい}よぬ^ぬぬ^ぬぬ。是を後妻^{ごさい}小か
 一トさきいり。何りがなく存^{ぞん}いと。アけまを。夫よて其
 方^{かた}が安心^{あんしん}の事^{こと}あまぞ。本意^{ほんい}いこまあくるへ共其通^{とお}り

は取計^{とりかへ}ひアをい。病人^{びやまん}大ひよよろとび。右の女を
 内^{うち}よてよひいせ。アきかせいへむ。右の女^めアい。何りがたき
 事^{こと}をから。後妻^{ごさい}とい思^{おも}ひもよ^よぬ。矢張^{やじやう}あま^ま迫^{まと}の通^{とお}りよ。
 奉公人^{ほうこうにん}よて使^{つか}ひ下^{くだ}さるべし。少子^{せうし}達の世話^{せわ}い及^{およ}び^びるが
 ら。生涯^{せうが}可^か仕^しい。夫共^{おとこどもども}是非^{せいひ}後妻^{ごさい}の思召^{おもひ}よい。何^{なに}ふも免^{めん}を
 蒙^{まう}り。いよとまを願^{ねが}ひてアとの事^{こと}よて何^{なに}分^{ぶん}聞^き入^{いれ}ふ^ふア故^ゆ小^{せう}光^{こう}
 手^てかけよ^よて。子供^{こども}の世話^{せわ}を致^{いた}させ。一生^{いっせい}前^{まへ}だま^まかけよて益^{えき}の
 前^{まへ}小^{せう}居^ゐり居^ゐて。ゆかふい^い同^{どう}扱^{じやく}し。致^{いた}し居^ゐり由^{よし}。何^{なに}ま^まり心^{こころ}立^た
 よま^まの故^ゆよ。子供^{こども}成人^{せいじん}の後^{のち}ハ。親類^{しんれい}打^{うち}寄^よ咄^{ぶつ}し合^あ。本妻^{ほんさい}小^{せう}直^{ちか}し
 アをへき由^{よし}よ得^え共^{とも}一向^{いっこう}相^あ随^{ずい}ひ^ひアさ^さむ。一生^{いっせい}奉^{ほう}公^{こう}人^{にん}よて終^{おひ}り

由。女小ハ弥カら若キ人カありと。皆ミくかめトあり。今世間シを見ルる。悪心アクシンの女共メノトモ多く何ニりて。男ヲをたぶらカして無理ムリ無性ムシヤウ小女房コメヤウはあらんと。屯トる女メえかリる。又男ヲとたまニ志シて金銀キンギンを取リ。男ヲをえどかよする女メ多シ。亦イ小此女コノメハ。主人ヌシの女房メヤウの頼タカといヒ。主人ヌシも納得親類ヌケトクシノトモの者モノ迄ト取リつと。夫ツを。夫ツと曰ハりて。本妻ホンサイはあらはな。一生シヤウ前マだニまかけして。釜カマの前マは居ルいとハ。無欲清浄ムヨクシヤウ小志コシて。業ノ父許由キヨユの聖人セイジンも勝マりたる女メあり。大身体オホシタの大金オホカネ小志コシつととも目メをかけば。本ホンの貧賤ヒンケンを守マりて。人ヒトらすとハ。若ニ天下テンカは少シクあきよき女メあるベ。男ヲをたぶらカして。金銀キンギンを

取リ。又イ無理無性ムリムシヤウ小志コシ所トコロの女房メヤウはあらんと。邪智ジャチ佞ネイ奸ケンの女共メノトモのよき鏡カガミとあるベ。何ニかどほめてもかめたる女あり。右ミダ九石クウシヤクのハ氣性キセイ実体ジツテイ小志コシて。家業ケノノ取リ締メりよき人ヒトあらはな。今イマ小相コソウかまりす。繁昌マンシャウせしとあり。若ニ主人ヌシの御ミ目鏡メカガミ小志コシて。下男ゲノヲ下女ゲノメを引揚ヒキアゲ下くださるむ。此女コノメの心ココロ地チなる。小志コシたき者モノあり。然シカる小大方オホカタの下男ゲノヲ下女ゲノメ下賤ゲセンの者モノを引揚ヒキアゲらると。もう若キめたといふ機又イあり。此上コノウハ此方コノカタの心ココロの徳あらりと。主人ヌシあり親オヤありの。大事オホジのくの人。不忠フチュウ不孝フコウをたる人を。幾人イクニも見ミたり。大悪人オホアクニといふべ。墮獄ダクツクハ遁ツクまかたし。恐オソるべ。僕ボク若キむべ。下男ゲノヲ下女ゲノメは限リらな。誰タレ入ヒて

も。若上の人より引上らるるを。身命をあげ打て思
 を報下奉るべし。是ハ佛神天の御定めあり。急度急
 略何るべからば。佛神天何分今の女のやうな。心よて一
 生を送るべし。さすまを。悪友事あり。此女の心の内清
 淨なると。さぞ涼しやうんと。うらやましく思ふ

此書の作者老老かこし。文化十二年夏修禪寺入
 湯の中。筆記をとりて。久遠のありぬ事也

◎心学養ひ草。五穀実則伏人間満則仰

◎実がいと。稻はうつむく。人の身も重なる。その
 がるあり此通り。又遠あり。人間ハ佛神と遠ひて人の下

は居る内ハ。至極柔和正直なると。物毎ひうへ目おして。よ
 い男よて何つたり立身出世と。人の上よ立て。威勢がよ
 くあると。直小恐ろしい。我慢者とあり。又己のたぐを
 して。地手勝手私欲身びいきと。下のあんぎをりま
 を。上へ不忠不義をするあり。己は賄賂する者小者。
 依怙ひいきの計らいをして。下の物を取上ると。此故不
 下の者も。又忠義の心ハあきて。上をおすめてあり。身
 勝手をせんと思ふあり。夫がつりて騒動とある。上下の
 難渋あり。是世間一体の人皆かくのごとく。人の下よ居る
 内ハ。部屋住賢人よと。至極よい人ある。一國の殿と

あり一斬の主トとある。直は恐ろしい我慢者となつて。
 下くは心配をかけるあり。又よい役義も不首尾とあり退
 役となつて。家も不吉を残す事あり。是といふは。阿ま
 り我身を大切過て。ひいさの引倒しをせるあり。世間大
 方の人皆かくのごとし。是は実智明德がなき故也。上へハ
 不忠不義を致し。下へハ不仁不法の悪人とあるあり。何
 卒学問をして。実智とそぐま。明德新民の人とあるへ
 し。上下の大幸あるん
 ○古文ニ其上は在る何ぞ以て喜むん。其下は在る何ぞ以
 て悲しまん。此心ハ貴賤貧福ハ皆天のあたす所なきを。

富貴たり共おこるべからば。又貧賤は生きたり共仕か
 る。唯身分相應の役をつとめ。身分相應のらうしをせ
 し。是よておを願ふよ及むん
 ○我役ハ心よそまぬ役あるまこと。天の役者のさしず是非あり
 ○古語曰君子ハ人の上たらん事を欲せば。いそんや高貴の
 人を凌がんやとあり。此心ハ誠の君子ハ人の上とあるん事を
 欲はば。いそんや無理を考て。人の上とある事ハ猶くせず無
 理小人の上とあるんとするハ。無智の小人あり。不忠不義
 の人也。是我身を高ぶりて。よき人よあるんといふ名聞
 のつよき人あり。至てはろし。氣苦勞を考て。頰てはろ

ぶる人あり。智者のせさむ所也

○中くは身を思ひ孫を、身ぞ安し。身を思ふも、身を苦しむ

○世の中の。人の敵ハ外はあり。思ふ我身え。我がかたきあり

○何事も。いやとせむを。身ぞあし。いやかたきとせむは、おじ

是等の歌の心をよく考つて。身の守りとせむべし。我身

勝手せむい。我身の安樂を思ひ。我身をよくせんといふ

名聞がつよい故の事也。大了簡達ひ誠の智者ハせざる所

也。我身を高ぶり。我身を利せんとせむを。大き小身の

を苦むる事也。免角我身い。や老き者と老けて。人極

を大事とせむべし。させむを安心とせむ。福德も来る。此故

は金剛經ハ人い。や老めらる。已むるは、やと思ひ果

下せむを罪とせむ。福德が増す。又徳もあきよ人の

貴むるを大ひ罪を得るとあり。然らば人よかる老

め。あかどくせむ。口惜く思ふべからず。福を増せとせ

む。かろ老め何あたらせむを悦ぶべし。又徳もあきよ

人よやまハまるハ。天道の憎を受けて貧乏人の身と

あるあり。ふらバ徳もあきて。人よ尊敬さるハ。大損とあ

る。又人い。や老めらるハ。徳とあるといふ。身をよく老

べし。あかハ人よかるべし。何あかむをいかるべからば悦

ふべし。歌よ

○和まよつらき。人をさのそよ。うらむかよをみかく種とおもふ
と。かやうと思へを身心共。安樂あり。又經文の通りなる遠
か。又上の三首の歌よてゆよくあるへ。又人のつづく何
たるも。かる者むも。此方の心得よて福徳を増たぬお遠
か。其證據ハ

○江戸表茅場町小。小西宗兵衛といふ者あり。此先祖ハ紀州
の者ゆて。幼少の時ハ至る貧乏よくらせしむ。其村の法と考
て。親の年忌先祖の年忌等の法事小ハ。村中ハ餅をくむ
るが其所の法也。尔る小此宗を洛阿まり貧乏故也。數よ入
す考て。法事の餅をくまふんだ家あり。宗兵衛幼少あめ

ら。母小向ひアをやうハ。法事の餅をるせくまぬと。いひ
けまハ。母ハ我子ガ。もちをくいたい故也。左換いふかと思ひ
て。餅を買求めて阿部川よ考て。く日せたとの事。此子心小
思ひけるハ。け方が阿まり貧乏故也。餅をくまふんだと見
へる。夫をくやうく思ひ。貧乏かどかふしき考ハあいと思ひ。
夫より江戸へ来り辛抱致し奉公をよくつとむる故也。近
所近邊のめ事也。其換ハ辛抱者故也。よま人の取持小
て。相應の家へ養子小をいり其身上を段くとよく致し。
今ハ江戸にて。名何る金持とふまき。是小よつて。何る年
紀州へあき。親の法事を考て。村中一軒ハ考らぬ。餅をくむ

け。先達先だつてらまゐんだ家へハ。各別各べつ又大き大くしてつうハ。先年先年幼少幼少の時餅を下さまゐんだ故故ハ。夫そとをくやあく思ひ。其事を忘忘れまは辛抱辛抱した故故ハ。今江戸にて大身体大金持とありたり。是偏こまひとへハ餅を下さまゐんだ蔭おかげありと。持とありたり。是前てまいは持参とまへして。其禮まてをいひ。其か土産物みやげものもやりとあり。是何なにを思おもひて報むかはるの善人ぜんじんなり。かやうな志こころ一故そのいふハ。其仁そのじん一生の間小大身体大金持とあり。今小子孫傳へて。小西宗兵衛とて。小西家の本店かんたか是也今小酒を五万駄だ六万だんの高たかかいを。一年小致すとの事こと。亦またを入のつらく何たりたも。辛抱辛抱の種たねとまを。我身の仕

合あはとる禍わざはひひ却かえて幸さいひとあつと。つらく何なにたりたる人ハ善知識ぜんちしき也。此小西宗兵衛こにしゆうべゑも。貧乏ひんぱんで法事の餅もちをくまゐんだ。大仕合おほしあひとありと。江戸小て名なあり。金持かねもちとあるとハ禍わざはひひかへりて大仕合とありたり。さまへ貧乏も人のつらく何たりも。人よいやあめらる。却かえて金持福徳たふくの種たねとあり事し何まを。人のつらく何たりも。いやあむむ。あまりくやむべあらむ。今いまの金剛經こんがうきやうの心。又まはつらき歌。三首の歌の心をよくありて。身みかより下くだり居おり。人よへりくどりてくらへし。さまを。福徳ふくとくり来りて。一生安心也。此儀ぎを能よくよく心こころにて。人よあめらるを。うらみと思おもふべからば

○堪忍かんにんハ百行ひやくかうの本もと一いつて。諸願成就しよがんじゆうじゆうの礎いせへ也。何事なにことも堪忍かんにんせさせたま。一切いっけつの願ねがひを成就じゆうじゆうせず。堪忍かんにんする事を考かんがふさせたま。万事ばんじ我意わがいを慕たづりて。身を亡なかすへ一いつ。兔角うじやく我意わがいを捨すて。万事ばんじは堪忍かんにんすべ一いつ。堪忍かんにん小色せうしきく何なにもども。衣食住いしょくぢゆうの三さんつ又また。奢おごりあきをよ一いつとす。我わが不限むげんを守まもりて。衣服いふくは綺羅きらをかざらす。飲食おんじを質素しつそ又考かんがて。住居ぢゆうこへ雨露うろを考かんがのけたま一いつとんゆて。華美くわびを好このむべからば万事ばんじ不足ふそくを堪忍かんにん考かんがて。物事ぶつじ内輪うちわあるをよ一いつと考かんがべ一いつ。盈えいまばかり十五夜じふごやの月つきあきど。万事ばんじ心こころ一いつめ又考かんがて。変かはりて身の分限ぶんげん又考かんがたる事を致いたすべからば。貴賤きせん男女なんにょとも又考かんがて。一生いっしやうを無事むじ

よ送るの秘術ひじゆつあり

○世よの中なかハ何なにもよ位まいせて。事ことたらぬ。たゞてりたる身みこそあけき
○足事たることを志こころ川がはて分限ぶんげんは。安んやすせば。貧賤ひんせんもても。常つね又何なにんらく
○足事たることを考かんがるこそ。人の宝船たからぶね。物のかたしつとみおろすと
○足ぬをも足たぎりと泳およむ心こころこそ。万まつ事こと足たることを考かんがめありけり
○古語ふるごよいく。第一だいいち親おやは孝行かうかうを尽つくす。上かみを敬うやまつひ下したを何なにも
きこ。家業かごうを生な精せい考かんがて。天あまの歩心ふしんは叶かなふやう又考かんがすべ一いつ。さすき
を。天あまより清淨せいじやうある禄ろくを下くださるべ一いつ。いまど身みをつとめす
考かんがて。幸さいひを求もとめんとするハ。木きよよ川がはて魚いそを求もとめんと考かんが
るりごと一いつ。大おほい又考かんがす。弟あだらぬ事こと也。又家業かごう其外そのほかの世祿よろこを考かんが

らぬ事よて。夜をふかーたきをとて。朝寐益^{あき}補^いをするやうな機^き根^{こん}よてハ。立身^{りゅうしん}出世^{しゅっせ}ハ出来^きがナ。歌^{うた}。

○朝起^{あさおき}ハ家を補^{おぎな}させぬ心^{こころ}がけ。何^{なに}つさ寒^{さむ}さよ。身^みをいといとるか。と。此^こ心^{こころ}よて一生^{いっせい}働^{はたら}くべし。福德^{ふく徳}安心^{あんしん}ハ願^{ねが}はずあて来^きるべし。

○又^{また}學^{がく}文^{ぶん}ハ此^こ上^{かみ}もあま業^{わざ}ふまとも。言^{げん}行^{ぎやう}を慎^{つと}まざまを。其^{その}益^{えき}ふし。古^こ書^{しよ}を聞^き誦^{じゆん}し。口^{くち}は聖^{せい}賢^{けん}の格^{かく}言^{げん}をいふとも我^{われ}身^みの行^{ぎやう}跡^{あと}放^{はな}蕩^{たう}ふらま。万^{ばん}卷^{けん}の書^{しよ}をよむとも。無^む益^{えき}といふべし。書^{しよ}をよま道^{だう}を學^{がく}ぶハ。我^{われ}身^みの惡^{あく}を改^{あらた}めて。善^{ぜん}を行^{ぎやう}ふ人^{ひと}々^々為^{ため}也^{なり}。たとい一言^{いちごん}半^{はん}句^くを聞^きとよとも其^{その}道^{だう}よ叶^{かな}ひて。よく身^みを修^{おそ}めふを一切^{いっけつ}善^{ぜん}事^じの根^{こん}本^{ぽん}よあて。福德^{ふく徳}の

よき出る泉^{いづみ}とあり。よく身^みを修^{おそ}め。親^{おや}よ孝^{かう}を尽^{つく}し。家^か業^{ぎやう}を出^だ精^{しやう}せむ。其^{その}外^{ほか}ハ皆^{みな}枝^{えだ}葉^{えふ}なり。先^{まづ}此^こ根^{こん}元^{げん}を能^{あた}つとむべし。皆^{みな}能^{あた}らぬ。あまたなる事^{こと}と思^{おも}ふべし。

○中庸^{ちゆうちゆう}といふ。必^{かならず}道^{だう}心^{しん}を。常^{とこ}は一身^{いっしん}の主^{ぬし}とあて人心^{じんしん}を考^{かう}て。毎^{まづ}余^{あま}を聽^きえむ時^{とき}ハ。則^{すなは}ち危^{あや}き者^{もの}ハ。安^{やす}く。微^びなる者^{もの}ハ。著^{ちやく}ハる。動^{どう}靜^{じやう}云^い為^い。自^{みづか}ら過^{あや}不^ふ及^ぎの差^さひありと。此^こ心^{こころ}ハ人^{ひと}の心^{こころ}もいさありと捨^{すて}置^おてハ。惡^{あく}心^{しん}をかり増^ま長^{ちやう}せむ。故^{ゆゑ}に。道^{だう}心^{しん}といふ。よき心^{こころ}を以^もて。人^{ひと}心^{しん}といふ。惡^{あく}心^{しん}を制^{せい}し。止^{とど}め補^{おぎな}をあらぬ。惡^{あく}心^{しん}を制^{せい}し止^{とど}むる時^{とき}ハ。危^{あや}き人^{ひと}の心^{こころ}も安^{やす}くあり。微^びなるき道^{だう}心^{しん}も。何^{なに}きら加^かはりてまて。よき道^{だう}

を通るあり。さすまを動く時も。静うある時も。口ていふ
 事も。身又為事も。皆おのづから過たる事もなく。及をぬ
 事もなく。中道のよい所を通るとあり。我心を我心でま
 めめ祿を。よき道ハ通りがたし。右扱又致さば身もよ
 く治まりて。一生福德安心あるべし。是とりふも。よき教
 へを受ざまを。よき道ハ通りがたし。是又よつて家業
 仕ハ老くして。隙あき者ハ。心學の近道の本茂よくらん
 じ。よき道を通りて。一生安心福德ふらすべし。何ん
 もふりかへしよんて。勘へずんを。知まかたし。よくよん
 て我物よすべし。隣の室を算へるやうの事では。用又立

かたし。たびくよんて工夫をへし

○又水精を以て。日又向ふ時ハ。火を取る月又向ふ時ハ。水
 を取る。一ツの水精又老て。水火の遠ひあり。心も善又向ふ
 時ハ。君子とあり。悪又向ふ時ハ。小人とある。一心は善悪の遠
 ひあり。人々慎みて善又向ひ。悪又向ふべからず。福德の来
 る事疑ひあり。何でも福德の来る道を通らすんを。智者
 といふべからず。歌よ

○若きより。年終る迄の樂々ハ。金取事又老くをのハあり
 と。此心は相遠かり。人間最上の樂々といふべ。毎日く金銀
 の這り来て。ふへるなどの樂々あり。一切の自由自在を

金銀も何らずんむ。出来がたし。金銀さへ何きを人の上と
あり威勢もよくて。尊敬せらる。此故は一切の方民が皆命
にかけて布しかるあり。爰を以てよくあるべし。金銀さへ
あかきむ。千仞の高山とひとども。登らざる所なく。千尋の
海の底とひとども。つゞき所なく。商人も金のむかひかる事何き
む。道を進むも。夜を日と経て千里を遠しとせず考てゆく
。何そや。利徳前より何を考る。唐船の毎年く何やまり
て。万里の海波を考のき。苦勞考て来るも。皆利徳を得
ん。為也。外より子細なく。漁人の海より。海波百仞あるまど
も。夫をいとハ考て。流も随かつて。出ざるハ。水も利徳何き

むあり。皆命がけの仕事あり。是則ち世間の人。千辛万
苦考て。金銀を求る事かくのごとし。是金銀ハ自由自在
あるが故。命にかけてしかるも尤あり。是ハ小人の事
とをかり思ふべからず。君子も又かくのごとし。然るども
君子ハ天命を考り。身の不と考りて。其道を以て求むる
。求め安く考て。其利多し。小人ハ天命を考らば。身のほ
どを考らぬ故。ふんぎ苦く多く考て。其利薄し。是君子
と小人との遠ひあり。君子ハ道ハ志きた。奥山といひ。海
の底も入て。小人のやうに働さハ出来がたし。小人ハ道ハ志
ら亦共。奥山も入て。木をきり。獅子様をとる。海も入て。魚

を取事ハ。小人の跡先あとさき見屯みとんであくしてハ出来がたあつ。亦また小人もあくしてハあぐぬ者也。又世をおさめ。人をおさむるハ智者君子ちやうじんもあくしてハ。叶あはぬ者也。小人も入用いりようあり。何なにまりいや者むべからず。又金銀財宝ざいほうの入用ハ。君子も小人も同一事也。命いのちハ食くを以てつあき。家ハ金銀を以てつあぐあり。こまよよりて。衣食住いしょくぢゆうの三つある者ハ。何なにでもかでも。金銀ハ入用也。君子小人共とも。身分身分相應あひあひハ貯たくわへ何なにるへ。又大切たいせつハ金銀故ゆゑ。容易やすうハ出来がた。沙石しゃせき集あつまひてハ金を求もとる者ハ。沙せを集あつめて。是こゝろを取り。玉たまを散ちぶ類るいハ。石いしを捨すひて。是こゝろを瑩えいくと何なにる。是こゝろ金銀を儲たくわけ。家を齊ととのへるハ

容易やすうの事ことハ何なにら屯とんといふ事也。然しかるハ心安しんあんく出来きるやうようと思おもふハ大たい了りょう簡かん遺いひ也。何なにても骨こつを折こ苦く勞らうをして家かを齊ととのふべし。

○士農工商しのうこうこう共とも。先祖せんぞよりの家業かごうを。正直しやうじきハ勤とめあえ。万事ばんじハ付つて。悪あく友ゆう事ことハ。諸願成就しよげんじゆうの本也。幼少ようせうより家業かごうをよよくつとむる者ハ。家いへハ繁昌はんしやう也。此故こゝろハ年老ねんねいてハ。樂隱らくいん居まり。又幼少ようせうより家業かごうを嫌きらひて。つとめざる者ハ。老おて貧窮ひんきやうあらんぎする也。人ひとハ此事こゝろをよよく考かりて。少壯せうさうより急いそ度家業かごうをつとむべし。一切いっけつの福德ふくとくハ家業かごうをつとむるよりより涌出ゆきいると考かるべし。

修むるを本とすといふ。語^ゴにてよくあるべし其身正^{ただ}しけむ
を。天下國家もよく治まりて。福德を以て。一生安心よく
らすべし

○家業相續^{けいごう}力草^{りきくさ}。唐^{たう}の太宗^{たいそう}阿^ある時勝^{ときが}きたる。賢臣^{けんしん}を
二人召^めて。守成^{しゅせい}と創業^{くわんぎやう}と^{創業といふハ初めて家を取立事}と^{守成といふハ其子孫其家を相續事}と^ハいひ
ま^まかたきぞと。尋^{たづ}ね玉^{たま}へむ。一人の賢臣^{けんしん}ハ。守成^{しゅせい}を難^{がた}
と^と上^あたり。一人の賢臣^{けんしん}ハ。創業^{くわんぎやう}を難^{がた}と^と上^あたりとあ
り。いづきも一理^{いちり}あり。又町人百姓^{ちやうじんひやくしやう}あても一^{いち}剎^{せつ}の家^のを祖立^{そだて}
る^まハ。尤^{もつとも}かたき事^{こと}あつ。是^{こゝ}ハ其人^{そのひと}ハ又智^ちもありて。天
運^{てん}は叶^なひ。金銀^{きんぎん}をもふけためる故^{ゆゑ}。勢^{いき}ひは乗^{のり}むる場^ばも

何^{なに}まを。別段^{べつだん}の論^{ろん}也。是^{こゝ}ハ左右^{とくさ}に扱^あむあり。又兔角^{とくかく}町人^{ちやうじん}百
姓^{ひやくしやう}の家^のハ。定禄^{じやうりやく}あき者^{もの}あて。一年^{いちねん}の徳^{とく}分^{ぶん}何^{なに}かと。極^{ごく}めたる
事^{こと}あけまを。家古^{かふる}くあもは随^まひて。奢^{おこ}りつき。物入^{ものい}多くあ
りて。守成^{しゅせい}を^{先祖より}承^つぐ^家。甚^{こゝろ}た六ヶ^{むつ}者^{もの}也。是^{こゝ}ハ百姓町人^{ひやくしやうちやうじん}は加
きらば。いづきの家^のもかくの通りありさまを先祖^{せんぞ}より受^う
たる。身上^{しんじやう}成^なたもの人^{ひと}ハ。新^{あら}ら若^{わか}く身上^{しんじやう}を祖立^{そだて}ると。等^{とう}分^{ぶん}
の薫^か功^{こう}也といへり。扱^あ守成^{しゅせい}のかたきといふ吐^とし又^{また}付^つて。近江^{おうみ}
の國^{のくに}。數代^{すうだい}續^つきたる百姓^{ひやくしやう}あり。其先祖^{そのせんぞ}より傳^{つた}へたる家^の
法^かあり。其家法^{そのかへう}といふハ。若^{わか}家貧^{かひん}乏^ぶ乏^ぶありて。立行^{たてゆき}かた
き時^{とき}ハ。先^ま一番^{いちばん}は道具^{たうぐ}を賣^うべし二番^{にばん}ハ。衣^い裳^さを賣^うべ

一。三番は居宅を賣べし。いややうは貧乏もあるとも。先祖より持傳へし。田畑を變へて堅く賣べからしとの掟也。先年既其家不如意ありし時。先祖の遺訓に任せ衣類道具を賣て。居宅迄及を志志て。元の如くは家を再興せしとあり。是よき教へあり。衣類を早く賣時ハ花美の花見抱山等のおごりをせは。又道具を早く賣時ハ。無用の酒宴飲食等のついへある事あり。おのづからある所の田畑を耕作せんより外あり。是大ひよよろ志きあり。然るは今の世の人ハ。外聞斗りを取て。年々利徳ある田畑を先へ賣て。衣類道具大宅ハ。食物尽るとも。持こた

へて。人目をかざる故。身上を取直屯時節あり。終は家を潰志て。乞食同前とある人多し。是実はおろろある事也。植木も枯かゝりたる時。早く末の方を切て。本木の生ある所を残し置時ハ下よりよき芽が出て。又元の如く又栄へる也。今右の衣類道具を先へ賣む。右の衣類あり。此枯たる木の末を切事ハ具原の此遺訓家法甚たよる道具衣類大宅道。賣共。田畑さへ何志を。肌寒の氣をひかへし。おとば。外の物ハ皆賣共。田畑さへうらば質はさへい志志を。いつぞハ元の大身上とある事。疑ひは百姓町人の相應は暮す者ハ。け手段を忘るべからし。子々

